

2021年4月4日佐土原キリスト教会礼拝

聖書箇所：ルカ福音書 24 章 13～35 節

説教題：最も美しい物語

皆さん、イースター、おめでとうございます。主のご復活を感謝します。

さて又吉直樹というお笑い芸人の方がおられますが、今は芥川賞作家としての方が有名です。実は彼の親御さんはクリスチャンで、彼も子供の頃、教会学校に通っていたそうです。その彼が、3年前の近畿大学の卒業式のゲストスピーカーに呼ばれ、20分程のスピーチをしています。最近、それを聞きました。最後の部分で次のようなことを言っておられました。「辛いこと、しんどいことが続く時は、これは次に良いことが起こる予兆だと考えるようにしている。水も喉が渴いている時に飲んだ方が美味しいように、しんどいことがあったら、必ず楽しさが倍増するようなことがあるんだって信じるようにしている。『バッドエンド(悪い終わり)はない。僕達は途中だ』というのが実感です。しんどい夜の先に、続きがある、そのことを思って頂きたいと思います。親御さんの信仰の影響だと思うのですが、「悪い終わりはない、しんどい夜の先に、続きがある」、それは「主の復活」のメッセージに通じるスピーチのように聞いたことでした。

さて、今朝の聖書箇所は「エマオ途上」と呼ばれる箇所です。「聖書の中で最も美しい記事だ」と言われます。ですから「この箇所を読むだけで十分」という感じもしますが、拙いメッセージをさせていただきます。

イエス様の十字架から2日後、日曜の午後、エルサレムからエマオという村に向かって歩いて行く2人の弟子がいました。イエス様の弟子でしたが、イエス様の十字架に直面して、失望し、何もかも捨てて故郷に帰ろうとしていました。彼らには近寄って来られたイエス様が分かりません。イエスは彼らに聞かれます。「ふたりで話し合っているその話は、何のことですか」(17)。19～21節にある彼らの言葉は暗いです。「あんなに望みを掛けていたのに、結局、彼は死んでしまった。全ては虚しく終わった」、そんな絶望感が伝わって来ます。彼らだけではない。「この人が我々を圧制から解放してくれる、この人について行けば良い」、弟子達はそう思ってイエス様について来たのです。ところが、その人が権力者に逮捕され、鞭打たれ、十字架に掛けられて行くのです。その恐ろしい現実の中で、彼らはイエス様を裏切って逃げてしまうのです。隠れ家に集まって恐ろしい時をやり過ごすのが精一杯だった、あるいはこの2人のように故郷に逃げ帰るのが精一杯だったのです。ここにおいてイエスという宗教家がいたことも、イエスを中心に活動していた集団があったことも、歴史の彼方に消えてしまうはずでした。

ところが2人の弟子がイエス様と食事の席についた時、彼らの目は開かれるのです。イエスの手に釘の跡を見たのかも知れませんが、彼らも信じられなかった。でも確かに目の前にイエス様がおられたのです。そして彼らは「イエスの復活」という事実を理解し始めるのです。理解した時、どうしたのか。(33節)「すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻る」(33)のです。エマオか

らエルサレムまでは11km。しかし、復活のイエス様との出会いによって、彼らの心は変えられました。まだ明るい道を暗い気持ちで歩いて来た2人でした。しかし、今度は暗い夜道を希望に支えられて歩くのです。信仰生活を象徴しています。どんな暗闇の中でも、希望に支えられて、夜明けを信じて歩くのが信仰生活です。とにかく彼らは、自分達の経験したことを仲間に知らせたくてしょうがなかった。これが、後に弟子達が復活のイエス様のことを人々に宣べ伝えて行くエネルギーなのです。何もないところから教会が生まれていくエネルギーなのです。

では「復活」はこの箇所はどんなメッセージを語るのでしょうか。目が開かれる前の彼らはこう言っています。(19～24節の抜粋)「…祭司長や指導者たちは、この方を…十字架につけた…その事があってから三日目になります…仲間の…女たちは朝早く墓に行ってみましたが、イエスのからだが見当たらない…御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです…」(19～23)。彼らは、御使いが「イエスは生きている」と告げたことを知っているのです。墓が空だったことも聞いているのです。それなのに目の前のイエス様が分からないのです。どうして彼らにはイエス様が分からなかったのでしょうか。イエス様の方にも以前とは違う何かがあったかも知れません。しかし彼らの方も、十字架の衝撃、あまりの失望、落胆で反応出来ない、イエス様の出現を受け止めることは出来ないのです。しかしその一番の理由を、イエスは(25節)「預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち」(25)と言われます。つまり「聖書の言葉に対して鈍い、聖書の言葉を信じないから復活を受け止めることが出来ないのだ」と言われたのです。だからイエスは、ご自身をお示しになるのに「私だよ、見てごらん。手には釘の跡があるだろう。脇には槍の跡があるだろう」という方法を取られませんでした。そうではなくて(27節)「聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」(27)のです。

神が天地万物をお造りになって、すぐに人間の罪の歴史が始まりますが、神は人間の罪の歴史に心を痛めながら、人間を救うために力を注いで来られた、それが聖書の大筋です。その救いの御業の頂点にイエスの十字架があるのです。弟子達は、その十字架にぶつかった時、神の御旨が見えなくなって絶望してしまいましたが、イエス様は(26節)「キリスト(救い主)は、必ず…苦しみを受けて、それから…栄光にはいるはずではなかった…か」(26)、それが「聖書に預言されていたことではなかったか」と諭されたのです。それが「イザヤ書53章」等の預言です。そして実際イエスは、十字架で苦しんで、私達と神を遮る私達の罪の罰を始末して下さり、私達が全ての罪を赦されて、神の御腕の中に飛び込んで行くことが出来るように、救いの道を造って下さったのです。そのための十字架でした。

しかし、十字架で終わりではなかったのです。神の御心を為し終えたイエス様を、神様は甦らせたのです。それが神の計画だったのです。

この箇所から2つのことを教えられます。1つは「物語を終わりにしてはいけない、終わりにしなくて良い」ということです。この2人はイエス様の十字架に直面して「もう終わりだ、何もかも終わった」と思ったのです。弟子達の全部がそう思ったのです。「イエス様の墓が空だった」

というニュースも、「天使が『イエスは生きておられる』と語った」というニュースも、彼らを立ち上がらせることは出来なかったのです。失望の極みだったのです。私は自分が急性鬱症で入院した時のことを思います。失望に打ちのめされて、誰が何と言って励ましてくれても、立ち上がることは出来ませんでした。彼らもそうだったのです。しかし、それは彼らの視点から見た話でした。神様の視点では、イエス様は、苦しみの後に栄光に入ることになっていたのです。出来事の意味も、結末も、全然違うものだったのです。続きがあったのです。

この物語は「私達に起こる出来事も同じではないか」と語るのです。私達の人生も、順風満帆な時だけではありません。時には悩みがあり、苦しみがあります。失望したり、落胆したり、そんなことが多いのです。その時、私達は先が見えなくなって、神の御心が見えなくなって、途方に暮れるのです。時に立ち上がる力もなくなるのです。しかし、それも人間の視点から見た話なのです。神の視点には、違うものが映っているのです。私は入院した時、又吉さんが言うように「これにも続きがある、これも良いことへ変わる」等ということは考えることも出来ませんでした。しかし、それは私の視点でした。神様にはご計画があって、そのことを通してご自分を経験させ、やがてその苦しい出来事を感謝出来るようになる、そのような結末に導こうとしておられたのです。実際、今もあの出来事が、私の弱い信仰をкаろうじて支えています。私達が神の御腕の中にあるなら、どんなに失望しようとも、失望は決して失望で終わらない。そうに違いないのです。私達が「終わった」と思うところ、しかし神様の方では、その物語は終わっていない、そこにも神の御旨は流れているに違いないのです。神に在っては、十字架の苦難は、復活の喜びに繋がっているのです。神に在っては、私達の苦しみは、後の感謝に繋がっているに違いないのです。「その信仰に生きて行きなさい」と、この箇所は語るのです。

もう1つ、この箇所のメッセージは「甦ったイエス・キリストが共におられる」ということです。2人は食事の席で目が開け、イエス様だと分かりました。彼らはそこまで気がつきませんでした。しかしイエス様は、彼らと共におられたのです。そして31節に「それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった」(31)とあります。「イエスは、彼らには見えなくなった」、しかし「イエスはいなくなった」とは書いてないのです。見えなくても、イエス様はおられるのです。彼らと共にいて下さるのです。そしてこの時から、イエス様を信じる者とイエス様が共に歩いて下さる、そのような祝福が始まったのです。教会は、その信仰に生きて来たのです。2人の弟子と歩いて下さったイエス様が、今も私達と(あなたと)共に歩いて下さっている、その真実を語るが故に、この物語は誰にとっても美しい物語なのです。

申しあげたように、私達の人生にも、失望し、恐れを抱き、落胆の道を日没に向かって歩いているように感じる時があるのです。しかし、そのような時にも、実はイエス様が傍らにいて下さり、私達を支え、私達が前に向かって歩くことが出来るように、共に歩いていて下さるのです。「足跡」という詩があります。(週報の裏面に全文がありますが、一部を抜粋します)。「『主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において、わたしと共に歩み、わ

たしと語り合ってくださいと約束されました。それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、ひとりのあしあとしかなかったのです。いちばんあなたを必要とした時に、あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、わたしにはわかりません』。主はささやかれた。『わたしの大切な子よ。わたしはあなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。あしあとが一つだった時、わたしはあなたを背負って歩いていた』(マーガレット・パワーズ)。ちょうど2人の弟子には分からなかったけど、イエス様が彼らと一緒に歩いておられたのと同じです。「イエス様が私と共に歩いて下さった。歩けないような時には、背負ってでも共に歩いて下さっていた」。作者は、そのことを語らずにおれなくてこの詩を書いたのです。それがイエス様を信じる者を包んでいる現実です。

そして、それは地上を生きる時だけのことではないのです。先日もゴスペルシンガーの岩渕まことさんのお嬢さんのこととお話ししましたが、お嬢さんが亡くなった時、岩渕さんの奥さん(由美子さん)は、「もう少し私が気遣ってやっていたら…」と自分を責め続けたのです。そんな時、イエス様が彼女に1つの夢を見せて下さいました。夢の中で、お嬢さんは、イエス様の膝の上に抱きかかえられていて、右手を振りながら「ママ、こっちは良いよ!」と言ったのです。それが、天国の現実でした。その天国の現実が、現実としてご夫妻の心に流れ込んで来て、ご夫妻は今、全てを主に委ねて、復活の希望、天国の希望を語り続けておられます。私達の人生の終焉も同じです。イエス様が私達を抱いて、死を越えて、天国に至るまで一緒に歩いて下さるのです。そして天国においても、私達と共にいて下さるのです。

イエス様は甦られました。今生きておられます。誰でもイエス様を心にお迎えするなら、神様に受け入れられ、神様の深い御旨、神の摂理の中を生きて行くことが出来るようになりました。そして、その歩みにおいては、イエス様が共に歩いて下さるようになりました。主の復活は、その恵みを私達に語ります。主イエスの復活を感謝し、お祝いしましょう。